有職オタク？の座談会

2019（R1）年　日本人形文化研究所（静岡県富士市）にて

新春座談会

（前編）

令和初の新春座談会は、「有職」がテーマ。年中行事マニアで行事や節句の飾りものをこよなく愛する林直輝氏と、加藤高明氏、酒井輝一氏、望月勇治氏のひな人形職人の方々に参加して頂きました。先般の即位の礼をうけての皇室の話、作り手としての思いと夢などを存分に語って頂きました。前後編として、1（#543）・2月号（#544）にわたってご紹介します。

MEMBER（五十音順）

加藤高明氏／㈲加藤人形社長〈愛知〉 ▪ 酒井輝一氏／㈱松よし人形〈大阪〉
望月勇治氏／望月人形〈静岡〉▪ 林 直輝氏／日本人形文化研究所所長〈静岡〉

なぜ有職にこだわるのか

望月　僕の場合は、ちゃんとしないといけないという頭が性格上あるので。お雛さまの基は、公家さんですよね。公家さんの衣裳は、空想のものではなくて実際にあるものなので。そこから調べていくと、有職に辿り着いてしまうんです。そうすると、いろいろとこだわって調べていってしまう。

酒井　職人としては有職というジャンルが「商品の一部分」でもあるんです。特に当社は、スワロフスキーや刺繍を使ったり、金彩を施したりという加飾した商品のジャンルもある。黄櫨染や黒の雲立涌など、有職故実に基づいた商品をお求めになるお客さまも多いので。ただ個人的な興味で言うと、王朝文化というか、近世以降の復古してからの有職が好きなんです。かつて「和宮様御留」というドラマがあったんですよ。ご覧になりましたか？

林　いいえ、私がまだ赤ん坊の時ですから、さすがに観てはいないですけど（笑）、あったということは知っています。

酒井　作者の有吉佐和子さんが、まだご存命の頃ですが。そのドラマでの、御所の言葉と装束が見事だったんです。雅な雰囲気というか、何か自分の琴線に触れるものがありました。王朝風のもの、現行の有職なども、今の我々の想像できる有職故実の中にある。理屈抜きで好きだなというところですね。一昨日、京都国立博物館で開催中の「流転100年」という、佐竹本三十六歌仙絵の展覧会を観てきたのですが、あれは現行の有職とはまたちょっと違うんですよね。

林　違いますね。

酒井　同じ十二単でも、束帯でもちょっと違う。鎌倉時代の装束ですが、今のお雛さまに通ずる形なんだなと、あらためて思いました。多分、僕が生きてる間に三十六歌仙全部が揃わないと思うので観てきました。

林　そうですね。あれだけでもよく集めたと思います。それに合わせて、今日は我が家の三十六歌仙図屏風を出しました（笑）。初公開です。

加藤　装束好きの皆さんの中に、僕が混じらせて頂けるのはすごくうれしいのですが、そんなに知識もあるわけではなく、ただただお雛さまを作る上で、有職というものを少し取り入れたらどうなんだ

ろうと思って、やり始めたのがきっかけです。もともと母方が問屋で、作るという仕事はあまりしていなかったのですが。ベビーブームの頃に、お雛さまが全然足りない時期があって、うちの父と母が少し作れたものですから、間に合わない部分は自分たちで作りなさいということで始めました。ただ、自分たちで始めたものですから、師匠がいない。本や文献、写真などを見よう見まねで、真似始めて作っていました。それで、僕の代になった時に少しずつ調べて、それをちゃんと商品にフィードバックしていこうというのが僕のスタートです。皆さんとはちょっとスタンスが違うので、ここにいること自体が本当に申し訳ないです。

林　そんなことはないですよ。

加藤　調べたり、いろんなところで着装を拝見させて頂くと、やっぱりおもしろいんですよね。皆さんの仰る通り、時代によって違ったりするのも、またおもしろいですし。また、ちゃんとしていなくてはいけないという気持ちが僕の中にも少しあって。お客さまに「これはどういうふうになっているのですか」と訊かれた時に、ちゃんと返事ができるように調べるようにしていたら、こういうことになってしまいました。知識量としては全然低いので、本当にお恥ずかしいのですが…。

林　私は皆さんとは違って、人形を作っている人間ではないものですから、きっかけというような話はあまりありません。私はこの静岡県富士市という地方の町に生まれ育ちまして、決して身近に何か有職的なものがあったわけではなく、うちも普通の庶民の家ですから当然関係はないのですが、小さい頃からいろんな年中行事が好きで好きでしょうがなかったんですね。特にそれぞれの行事に使う飾り物が大好きで、地方の普通の家でやってきたからこそ、より本格的なもの、本物と言われるものを知りたいという思いと、本物や元祖、原点だというものが分かれば、それを追い求めたいという憧れがありました。私は、いろんなタイプの節句飾りが好きですから、必ずしも有職が絶対とは思いません。けれども有職というものが、いろんな飾り物や調度品などに与えた影響というのは、ものすごく大きいですからね。まったく素通りすることは、逆にできないだろうと思っていますね。

酒井　当然有職というと文学や、季節の自然の流れなどからも離せないし、皆すべてに関わっている。

林　そう、宮廷における生活文化のすべてですからね。決して服飾のごく一部の話ではないですから。

文様の優れたデザイン性

望月　有職文様も、デザインがすごくいいじゃないですか、どれ一つとっても。それを千年以上前に完成させているというところがすごいなと思うのですが。立涌にしても、曲線だけで表現している。そこに雲とか藤とかいろいろ入れることによって、また別の文様ができる。その使い方が非常に上手いなと思うんです。

酒井　上手にパターン化されているというか。

望月　ちゃんと昔からあるようなデザインになっていますよね。僕の好きな文様は雲鶴なんです。「うんかく」という響き自体も好きだし、鶴と雲だけで何であれだけの表現ができるのかなという。そのデザイン性も、非常に素晴らしいなと思うところですね。

酒井　そうですね、雲鶴文様って品があっていいですもんね。

望月　ただ、実際売るとなると、あまり出ないんですけれど（笑）。

酒井　お雛さまにした時に、衽のところで鶴の首が切れたらどうしょうかとか、そういう心配の方が僕らの頭にありますよね。

加藤　「顔がない」って言われますからね。

（一同笑）

望月　推奨する本として今回持って来たものの中の一冊で、『平安

三十六歌仙図屏風（磯田長秋筆）

酒井輝一 氏（AGE 54）

1965（S40）年、愛知県名古屋市生まれ。明治大学卒業後、西武百貨店に入社。河崎人形東京店を経て、㈱松よし人形に入り、小出松寿に師事。節句人形工芸士に認定される。小出氏より「一翔」の号を授かる。同工芸士作品展にて、「桃太郎」で銅賞を受賞。古典的な京人形の作風が特徴。ちりめん人形の創作などをライフワークとする。

文様』という素材集があるのですが、文様のパターンがちゃんと出ているんです。浮線綾文とかもしっかりと出ていたので、サンプルとして見たりしています。丸文だけでもかなりの数がありますし、誰がどう考えたのかは知りませんが、近代に通じる、家紋とは別のものとして、非常に優れたデザイン性だと思いますね。

林　なにしろ長い歳月をかけて、美にうるさい人たちが洗練させてきたものですから、現代の我々の時代で足したり引いたりできないレベルに、完成されているわけですよね。

――　少し意匠のバランスが違うだけで、ヘンな感じになります。

林　そういうことなんですよね。今、織物の型起こしが昔に比べてものすごく簡単になって、新しい織物をすぐに織り出すということが可能になっていますよね。それでもその基は、必ずデータで入れなければならないわけです。せっかく完成されている文様でも、型を作るのにおかしなものを入れてしまって、それが活きないというのはもったいないことですよね。完成されたものがあるのだったら、それをそのままに忠実な形で入れないと、いいものはできない。

――　皆さんのお話をお聞きしていると、有職ってかっこいいなという気持ちになってきました。

林　それはやっぱり、かっこいいものですよね。最高の世界の人たちが、最高のものを求めてそうしてきたものなわけですから。

込められた意味合い

加藤　私が初めて有職文様に興味を持ったのが、名古屋市博物館でメソポタミア文明展が行われた時です。発掘された壺に七宝文が刻まれていて、七宝文は日本のものだとずっと思っていたのですが、その時に初めて、世界に通ずる文様だということに気づかされて、これはグローバリズムなのかと思った時に、奥が深いなと思って、いろんなものを見るようになりました。僕も雲鶴が好きなのですが立涌文が好きで、この循環していく、常に続いていくという意味合い、続くためには世界の平和にもつながっていくので、そういう面で言えば、世界に通じていくのかなと思っています。

望月　意味が非常に大事ですよね。今チャカチャカしたものとか可愛らしいものが多いのですが、有職文はそこに何かしらの意味が込められていますから、「唐草は子孫繁栄だよ」とか買ってくれるお客さまに説明しないとダメですね。

加藤　逆にお客さまにご説明すると、「そういう意味があるんですね」と感心されて、「じゃあこの

「雲鶴」（江戸時代の親王・摂関の袍）

「桐竹鳳凰麒麟」（後奈良天皇御袍）比較的古式のもので、装束として用いることができるのは天皇だけ

「藤立涌」（江戸時代将軍家の衣）

生地の柄は？」と興味を持たれるので、すごくうれしいです。

酒井　私の会社では、お客さまがそういうことを欲しているんじゃないかということで「何なの？」という素朴な疑問から、生地の説明などを必ず入れます。それでお客さまに喜んでもらう、本当の今の有職なり何なりの意味合いを分かってもらう。意味合いを知ってもらうというのは、何かにつながるかなというのはありますね。

望月　タイムリーなところで、即位の式がありましたが、桐竹鳳凰麒麟の装束を着られたのだから、そこでその文様に何の意味があるのか、ただ天皇が着たというだけではなく、説明があってそこで意味を知ってもらいたかったですね。

望月勇治氏（AGE　41）

1978（S53）年、静岡県静岡市生まれ。人形師の祖父と父に師事し、研鑽を重ねる。2017（H 29）年、東京国立博物館からの依頼で五人囃子の小道具『舟形烏帽子』を復元製作する。2019（H 31）年、伝統的工芸品「駿河雛人形」伝統工芸士に認定。幼少の頃から雛人形や雛道具に興味を持ち、様々な人形などを制作、研究する。

加藤　テレビなどで意味を解説されている方がいらっしゃらなかったので、今回はそこがすごく残念だと思いました。

有職が少し身近に？

酒井　ただ一日中テレビで、黄櫨染の御袍黄櫨染の御袍って、ずっと流れていて。今年の商戦は黄櫨染がどうなるのか、商売的には気になるところなのですが（笑）。黄櫨染の色合いの表現って難しいですね。

望月　今回の黄櫨染はどちらかというと、写真映りの関係もあると思うのですが、かなりくすんだ色目でしたね。

林　基本的に明治天皇以降は、江戸時代のものに比べてかなり深い、濃い色のものになっていますね。テレビで「黄櫨染というのは天然染料だから、毎回染める色が違って出てしまう」という説明をもっともらしく言っていたのですが、いや、そんなことではないだろうと（笑）。植物染料で染めると毎回色が違ってしまうというのは、染める人が下手なだけで、素人の草木染が好きな人たちの世界の話ですから。「天然染料がよくて化学染料が悪い」というような話も、必ずしも実態にそぐわない意見ですよね。

――今年の七五三は、十二単を着たこどもが多かったそうです。

加藤　ええ！　そうですか。

林　うちも、そんなふうに思われてしまうかな（笑）。甥の七五三で、水干を着せるのですが。

望月　水干姿のこどもは、なかなかいないでしょうね。

――十二単は大人の女性が着るものなのに、こどもに着せるのはどうかという意見もあります。

林　こどもだったらこども用の、童の装束を着せたら可愛いのにね。そこまでは考えないんでしょうね。

加藤　細長とかですかね、あれは可愛いですよね。

酒井　大人の装束を着せると、ど

「七宝文」

「唐草文」

八條忠基著『平安文様素材 CD-ROM』㈱マール社 2009

うしてもコスプレの一環みたいな形になってしまう。

加藤　そうですね。そうなってしまうのが、もったいない感じがしますけどね。

林　こども用の装束というのがちゃんとありますからね。洋服の世界でも、こども服がありますし。大人のものをまったくそのまま小さくしたのではなくて。

酒井　本当にそうですよね、こどもにはこどもに合わせた装束を着せると、それらしく見えますよね。

加藤　仰る通りですよね。大人になってからやれることは、こどものうちにやっちゃダメですよね。こどもの時にしかやれないことを、こどものうちにやらないと、もったいないですよね。

お薦めの本

望月　この本に、装束の写真が載ってるんですよ、恐らくおじいさんのものなのですが。

林　風俗研究家として著名だった、江馬務さんの本ですね。これは〈正〉〈続〉で2冊あります。これは〈続〉ですね、結構いいものですよ。

望月　仕丁の浅沓を持っている方が素襖を着ているのが、実におもしろいなと思って。

林　なるほど、白張ではなくて。

望月　そう。おもしろいので、作ってみたいなと思っています。

林　たまに江戸時代の仕丁で、素襖を着ているのがありますね。

酒井　私は、ちょっと拝見したことはないのですが。

林　そうですか。普通の3人揃っているものではなくて、牛飼も付いていたりするタイプに。

酒井　私のお薦めも、仙石宗久さんの『十二単のはなし』ですね。あと、これは有職ではないのですが、『室町の王権』という本もいいですよ。

林　皆、同じ本を持って来ている（笑）。

望月　皆、合わせちゃってて（笑）。トランプしているみたいですね、絵を揃えて。

酒井　そうですね。林さんの論考も載っている『岩崎家のお雛さまと御所人形』も、本当に素晴らしい。図版も文章もすごいし、僕らが謎だった部分、職人の名前なども書いてあって。人形の写真の撮り方とかもすごい。これは宝です。

林　あれは幸いにして、最初からご相談を頂いていたので、皆さん多分こういうカットが欲しいだろうなと思いまして、「ここを載せた方がいい」と言えたのがよかったんです。ほとんどの図録は、前からのワンカットしか載っていないじゃないですか。

酒井　人形の十二単の本は、これだけでもいいかなって。本当に。

林　ありがとうございます。高倉

加藤高明氏（AGE　50）

1969（S44）年、愛知県名古屋市生まれ。愛知学院大学2回生在学中に加藤人形に入社し、父である加藤義則に師事。2005（H 17）年、同社代表取締役就任を機に、作号を蓬左佳峰に変更。名古屋伝統産業優秀技術者、同功労賞、名古屋技能職団体連合優秀技能者などを受賞。社会の事象、人気映画など様々なモチーフを人形で表現することを好む。代表作は「美女と野獣」。

仙石宗久著『十二単のはなし－現代の皇室の装い』（㈱オクターブ）1995

『～桐村喜世美氏所蔵品受贈記念～ 岩崎家のお雛さまと御所人形』（〈公財〉静嘉堂 静嘉堂文庫美術館）2019

『ジェニー#13 十二単と花嫁衣裳』（㈱日本ヴォーグ社）2002

流の仙石さんの本は、多分皆さんどなたもお持ちでよくご覧になっていると思います。実際に皇族の方々の着装に携わっている方が、こういう本を出してくださるというのは非常にありがたいですよね。

加藤　本当に仰る通りですね。

林　確かな情報を、これだけ分かりやすく出して頂けた。これは人形業界に携わっている方は、必ず1冊は持たなければいけない本だと思います。

酒井　現行有職が全部詰まっていますからね。

望月　もっと言うならば、山科流のこともう少し突っ込んだ話があればよかったなと思うのですが。

酒井　着付けの違いだけは書いてありますがね。

林　それはさすがに、立場上、高倉流の方には望めない（笑）。

望月　実際は、山科流の方がよく使われていますよね。

林　そうですね、山科流の詳しい本は今までないですね。

望月　ですから、両方を載せて実際の着装の違いを着ている姿で、どう違うのかを表現したものが欲しいですね。

加藤　確かにそうですね。

酒井　有職のことでは、高校生くらいの時の『国語便覧』が一番簡単でおもしろかったです。

林　私の知り合いにも、その編集をされていた先生がいますよ。ご本人がお好きで、ご自分の持っている資料もたくさん載せて出版されたのですが、すごい内容なんです。有職の本や歴史画の本を見ても、ちょっと載っていないようなものが載っているんです。

加藤　皆さんは多分持っておられないかもしれませんが、私は『ジェニー十二単と花嫁衣裳』という。

林・酒井・望月　おお～。

酒井　これ、当社の社員が持っています。

加藤　これすごくちゃんとしているんですよ。型紙までついていて。

林　どうしてこんな本が出たんですかね。こういうのが好きな、おかしな人がいたんですか（笑）。

加藤　おかしな人がいたんでしょうね（笑）。

酒井　その社員がお得意先からの依頼で、「ポポちゃん」という人形に、その本を参考にしながら、小袿と狩衣を着せたんですよ。狩衣の袴は上手でした。

加藤　うちもときどき、ポポちゃんに着せるものを作ってほしいと頼まれます。

酒井　もうポポちゃんあるわ、クマはあるわ、もういろいろありますね（笑）。

望月　結局、脱着式ですからね。

酒井　脱ぎ着せというのが本当に難しいんですよね。

加藤　難しいですよね。

林 直輝 氏（AGE　40）

1979（S54）年、静岡県富士市生まれ。目白大学人文学部卒業後、2002（H14）年吉徳資料室に学芸員として勤務。同室長を経て、現在客員研究員。日本人形玩具学会理事、日本風俗史学会理事、全日本だるま研究会副会長、経済産業大臣指定伝統的工芸品産地委員、日本人形文化研究所所長。なお、古美術店「骨董喫茶健康堂」の代表であり、凧絵師でもある。

林家の室礼①
当日のために、林氏が有職にちなんだ室礼をしてくださいました

「ポポちゃん」
〝幼い母性〟を育む知育人形として1996年に発売された。手足の関節が360度動かせる、着せ替え人形

酒井　今年の始めに、当社の社員が球体関節人形「あやちゃん」に小袿を着せることになって、「これは総裏にせなあかんで」と言ったのでそうしたのですが、大変だったと言ってました。有職の装束で総裏は難しい。ふきを出さないといけないしね。

実際を知ることの重要性

林　お薦めする本として、やはり有職の世界のことについて、私自身が信頼して、この方が書いたものだったら間違いはないと、長年ずっと読んできたものは、國學院大學の教授だった鈴木敬三先生が書かれたものです。『有識故実大辞典』という辞典も、鈴木先生の編集でいろんな分野の専門家が分担執筆して出されています。その鈴木先生が、國學院高等學校で出した『古典参考図録』はご存知でしょうか。高校生を対象にしたものですが、高校生に理解できるのかなという内容なんです。

加藤・酒井・望月　これはすごい！

林　私は残念ながら、生前の鈴木先生にお目にかかることはなかったのですが、先生に教えを受けた有職や甲冑の世界の方とお付き合いがありまして、鈴木先生の人となりを聞いているのですが、この先生自体が変わった方なんです。こどもの頃から甲冑が好きで好きでしょうがないという人で、一生その世界に生きた方なんですよね。でもいわゆるオタクというのではなく、宮内省に奉職されたり、本当に学者としてその道を究められた方なんです。この本も、国宝や重要文化財を忠実に原寸複製したり、あるいは2分の1縮尺で再現したりしていて、とにかく現物、原資料にこだわっています。ところがその解説は、まったく読む対象を無視しているんです（笑）。高校生用だから高校生に分かるように簡単に書く、ということはしない。大学の授業も同じで、先生の授業を聞いている学生は、初めからもうちんぷんかんぷん。一方的に専門用語ばかりで進めていくそうです。だから、そのままでは分からないので、自分で下調べをして次の授業に臨むとか、復習しても分からないから、自分で調べる。そういう教育方針だったそうです。最初から、分からないと言ってついてこられない人は相手にしていない。

（一同笑）

林　でもそれによって、その後のいろいろな学問的な世界を引っ張っていくような逸材が、この門下からたくさん出ているんですよ。

酒井　これは素晴らしい本ですね。

林　これは改訂増補版なのですが、あとの方が充実しているんです。

望月　更新されているんですか。

林　そうなんです。このほかに、別冊で図版資料が多い『古典参考資料図集』があります。古文献の中に出てくる、墨で書かれたものをそのまま載せたものがもう一冊別に。少し横道にそれますが、その鈴木先生が昔主催していた、歴世服装美術研究会から『日本の服装〈上〉』という本が出ています。これは〈上〉しかないという本で。

加藤　その本持ってます。僕、〈下〉探してたんですよ。ないんですか（笑）。

林　最初から、出ていない。

（一同笑）

加藤　すごく不思議な本ですね。

林　当時の錚々たる日本画家の方たちが、これに参加していました。歴史的な題材の絵を描くには、実際の着装を十分理解した上でなければ、本当の絵は描けないという考えからです。そういう姿勢を持っていたということは、素晴らしいことだと思いますし、私は人形

鈴木敬三編著『古典参考図録』（國學院高等學校）1978。改訂新版は1999年に発行された

鈴木敬三著『有識故実図典 ―服装と故実―』（㈱吉川弘文館）1995

歴世服装美術研究会編『日本の服装〈上〉』（㈱吉川弘文館）1964

もまったく同じだと思うんですよ。ひな人形を作るのに、実際の装束を知らないで単にイメージで作るのと、実際にどういうふうに仕立てられているか、着た時にどんな形になるかを知った上で作るのはまったく違う。もちろん、人形は人形、絵は絵で、それぞれまったくそのまま現物通りにやるという必要もないし、またそうするとおかしなこともありますよ。等身大ではないですから。でも、現物を分かっていて省略するのと、分からないからいい加減にこうなっているのと、全然意味が違いますからね。

酒井　そういえば井上雅風さんが、「絶対に着装姿を見ないとダメだ。見ないと、人形の風合いや雰囲気というのが出ないよ」と仰っておられました。膝のふくらみも、人形にするとあの表現をするのが結構難しい。やっぱりちょっとしたとこですね。十二単もそうですが。

望月　人形は、あまり写実的につくってしまうとおかしなことになってしまう。雛なので、作るにあたっては「らしさ」が一番重要なところですよね。だから、ある程度略すところは略して作る。そこに気をつけないと、ヘンな形のものばかりになってしまいますから。一体これは何を着ているんだというようなものも、中にはありますよね。

酒井　結局我々の仕事って、根元を知った上でこしらえているのではなくて、そこから流れて作られていったものを基に、真似て作るということが多いので、余計そういうことがあるんでしょうね。

望月　真似てね。先代がそういう作りだったからということでね。なあなあで、ずっときてしまっている。

酒井　そうですね。他所のメーカーがこういうことをしているから、これが今の流れだろうという考え方とか。かといって、全部人間と同じように着せて座らせたらちゃんとなるかといったら、ならない。いろんな複雑な問題がありますよね。やっぱり人形は人形としてのフィルターをかけた上で。腰の据え方もいろいろありますし、全部が全部100％の表現はできないんだけれども、気持ちはやっぱりある程度、「自分たちが根元だ」というくらいの考え方でないと。根元というほど偉そうなものでもないのですが、「うちはうちのこの表現でやっているんだ」というのがないと、人形の特色って出てこないところがあって。ただ、今の業界のことを考えると、いろいろこだわったり、いろんなことをしたいけれど、なかなか難しいこともありますね。流通にかかるものを作らないといけないということもある。

望月　伝統だけにこだわってしまうと、やっぱり難しいですよね。それで食っていけるかというと、なかなか食べていけないですよね。そこからまた、派生した何か別のものを生み出していかないと。完全な有職故実だけでは、難しくなりますよね。

宮　中の年中行事

林　それから最近では、東京国立博物館の猪熊兼樹先生の本。有職研究の家系である猪熊家の若君にあたる方ですけれど、ご本人が非常に有職関係にお詳しくてお好きなので、いろいろな本を出されています。猪熊さんもものすごく厳密で、常に史料に基づいて書かれているので信頼がおけます。江戸時代の伝統的な宮中行事が明治以降廃れていって、旧儀が分からなくなってしまうといけないという昭憲皇太后の思し召しで、描かせ

東京国立博物館セレクション　猪熊兼樹著『『旧儀式図画帖』にみる宮廷の年中行事』（東京国立博物館）2018

1990年に出た臨時増刊号。左から『アサヒグラフ』『毎日グラフ』

㈱メディアックス発行のMOOK本。2019年

た『旧儀式図画帖』というものがあるのですが、実際の行事が詳しく描かれていて、ものすごいんです。当時は写真がないから、絵でちゃんと残しましょうというものなのですが。

酒井　画帳みたいなんですね。

林　そうです。明治に江戸の宮中行事を描いたものです。これが全部、猪熊さんが出された「『旧儀式図画帖』にみる宮廷の年中行事」に紹介されています。全部カラーで見られるというのは、今まであまりないんですよ。また、細かな説明があるので分かりやすいですよ。

――なるほど。

林　参考書ということで番外的には、ご大典の時には、雑誌などの臨時増刊のような本がいろいろ出ますよね。こういうものは買っておいた方がいいですよ。その時しかないので。わりと細かい写真が載っていたりします。これは昭和の時のものですが、香淳皇后のお若い頃の写真が載っていて、これはもうお雛さまそのものという美しさでしょう。

酒井　本当に猪山さんの頭に通ずるところがありますね。お着物の刺繍が、お公家さんの有職のですよね。

林　お縫いの御召（おめし）ですね。またこのお雛さまと同じ雰囲気の髪上げも素晴らしい。衣裳や着付けもそうですが、現物を見ないといけないということは、特に髪付屋さんに強く言いたいですね。

ひな人形の原形とお召もの

酒井　応仁の乱などで、平安朝のものがなくなってしまって。よく聞くのは、その後に日野富子が長袴を履かずに参内してから、打掛になったんだと。それからずっとそのまま続いて。今も残っている十二単は、どなたのものでしたか。

林　東福門院です。それで寛永有職ができるわけですね。

酒井　その十二単は、掛帯がこうあっていかにも…。

望月　訳が分からないですよね。

酒井　掛帯の重さで裳袴を支える、というやり方なんでしょうか。

望月　ここはどこにいってしまったの？という感じでね。どこかの資料で見ると、小腰が掛帯になったというふうになっているし、じゃあここはどうやって縛っているの？という話になりますし。

酒井　お雛さまの原形になった装束姿を、庶民が見れたんですか？

林　江戸時代にはご即位の儀式のたびに、京都御所が公開されて庶民が見られたということですから、ある程度は見ていたでしょうし、あとは絵画などを参考にしながら、現実を分からないなりにそれらしく再現したというところだと思います。京都の場合には有職雛があるように、直接的にお公家さんが指導してそのままを作らせたというのもあったでしょうね。有職雛を作った職人というのは、有職雛だけを作っていたわけではなくて、普段は町方のひな人形を作っている人間が、そういう注文に対応していたわけですからね。

加藤　なるほどね。

酒井　今年の展示会の時に、取引先の方から、今回の皇后さまのお衣裳がどうなるのかと訊かれて、資料の本に白の唐衣というのが載っていたので、それでご説明しました。

望月　仙石さんも、テレビでも言ってました。ずっと白が続いているから、ということでね。実際白だったのですが、唐衣の襟がちょっと明る過ぎるんじゃないかと思ったりしたのですが。

酒井　あの襟で、メーカーさんが結構苦労しておられるみたいですね。緑でしたから。

加藤　緑はびっくりしましたね。でも僕は、緑じゃないかなと思っていました。ご結婚の儀の時が緑でしたので。

望月　その時の緑は、結構濃かったですね。今回はちょっと薄いものなので、表現が難しいなというところですね。そういえば、皇嗣になった秋篠宮さまも黄丹を着ていたじゃないですか。皇嗣でも着れるのかなと思っていたのですが。

加藤　そうなんです、それをお訊きしたくて、今日は伺ったようなものなんです。

林　訊かれても、私がそれについて答が出せるわけではないので（笑）。例外的なのか、今後はそうするのかはよく分かりませんね。

望月　長男と次男は別格ですから、着るとダメなんじゃないかと。

林　そうすると今度は、悠仁さまが大きくなられるとどうなるのかね。ずっと皆さまがお元気で高齢化して、悠仁さまが成長すると何をどういうふうに着られるのか。

望月　その前に、愛子さまかもしれないし。

加藤　愛子さまは今は順位がついていないわけですが、順位がついた時には何をお召しになるんです

かね。僕はすごく興味があるんですが。だって佳子さまや、眞子さまみたいなものでもないですよね。紀子さまでもないですよね

酒井　昔の江戸時代の女帝の方は、即位の時は袞竜（こんりょう）の御衣というのですか、そういうのを着たと聞いたことがあるのですが。

林　儀式では、ですね。

酒井　儀式以外はどうなるんでしょうね。

林　それまでは当然、成年皇族としての十二単になるんでしょうね。

加藤　準じて、ということなんでしょうね。それは特別感を出さないで？

林　いいえ、特別感は出るでしょう。秋篠宮さまとか三笠宮さまの、今の妃殿下の方たちのとは違うでしょうね。

――　そう思うと日本っておもしろいですね、皇室があってよかったですね。

望月　ずっと続いている王室って、日本ぐらいじゃないですか。初代神武さんから。

――　こんな時代になっても、即位の礼があんなに盛り上がるなんて、すごかったですね。

平成のご即位

林　私は平成のご即位の時は小さかったので、その時どうだったかということが自分の記憶の中で、はっきりしない部分もあるのですが、こんなにテレビなどで、高御座がどうのとか黄櫨染がどうのとかって、朝から晩までやっていましたか？

酒井　私は社会人になった頃でしたが、その時もやってたことはやっていました。大嘗宮も見に行きましたが、人も結構来ていました。ただあの時はまだ過激派だとかいろんなことがあって、高御座を京都から空輸したとか、そういう話題の方が多かったように記憶してます。

――　今上天皇の崩御があってからのご即位という経過なので、今回のように慶祝ムード一色ということはできなかったですよね。

加藤　仰る通りですね。僕は学生でしたが、崩御されたのは一月の七日で、大学のクラブの新年会で飲みに行ったのにネオンが一つも点いていなくて。サラリーマンたちが皆で「自粛～」と言って騒いでいたのを、この人たちどうなんだろうと思っていました。

酒井　その頃私は西武百貨店で働いていて、「歌舞音曲禁止」というのはこういうことだなと思いました。

加藤　そうですね、し～んとなっていました。

酒井　それで、赤いものは全部取り下げたんです。ちょうどセールだったんですが、それを全部取り下げてやっていました。

林　私の当時の思い出というと、テレビで、東京を始めとした都市部で、国旗の竿の先の玉に黒い布を被せて、黒いリボンを下げるというのを生まれて初めて見ました。私は行事マニアですから、それをやりたいわけですよ。それまで知らなかったことでもあって。

（一同笑）

林　小学校3年生だったのですが、テレビで見ただけでどういうふうにできているのかがよく分からない。まずとにかく黒い布を四角形に切って。四角くて平たいものをあの丸い玉のところに、皺をどういうふうにとれば綺麗に包めるのかなと。

加藤　（笑）悩みますよね。

林　四方向が同じように、同じバランスでないとイヤなわけですよ。それで熱が出てしまいました。

（一同笑）

林　それが一番の思い出です（笑）。

酒井　今回は雨でお庭に皆が並ぶことはなかったのですが、前回のご即位の時はすごかったですね。これぞ現行有職の決定版というか。

加藤　すごかったですね。

林　この部屋に掛けてある「萬歳」と書いた旗は、昭和3年のご即位の時の記念に、髙島屋が売り出したものです。

酒井　まだ、鮎の模様が入っていますね。今はもうないですよね。

加藤　それも訊きたかったのですが、この間みやこメッセで展示さ

林家の「萬歳幡」の掛軸

れたのですが、孝明天皇かどなたかの即位の時の高御座を作っていて。その周りの人の袴に鮎が刺繍されているんですよ。あれはなぜ鮎なんですか？　それがまったく分からなくて。

酒井　神武天皇や神功皇后の話になるんですかね。建国神話や三韓征伐など、鮎で占いをしたという。ただそれは、神話につながるというので、今は鮎を付けていないんですかね。そんなイデオロギーに関係するようなこと、我々の業界もそうですが、あまりそれを言い出されるとちょっと…（笑）。

加藤　（笑）確かに。

酒井　これは半臂に鮎が刺繍してある。そういう関係じゃないのかなと思うのですが。

林　やっぱりそうなんでしょうね。鮎という字自体、魚へんに占うですし。祇園祭にも「占出山（うらでやま）」がありますね。

酒井　祇園祭といえば、今年初めて放下鉾の三光丸の人形を見ましたが、結構なものでしたね。

林　はい。あれは将来、重要文化財にして頂きたいほどのものです。

酒井　面庄さんと大木さんのね。

林　傑作です。本当に見事ですね。またあの鉾の上で動くと、まるで生きているようですよね。

酒井　三つ折れ以上の動きをするという。

林　そうなんです。下手な生稚児を乗せるよりも、あれの方がよっぽど神々しい。

酒井　この冠がまたすごいんです。

林　すごいですね、天冠がね。

望月　安い金額で作られたとか。

林　そうらしいですね。丸平さんが「神さんのことやから、ええんや」と言われたそうで。

酒井　伊東久重さんの於兎丸や、面竹さんの菊丸とか稚児人形はほかにもありますが、三光丸は特に素晴らしかった。

着　装体験がしたい！

――　ひな人形製作のために、十二単を着てみたいというお気持ちはありますか。

望月　着てみたいというよりは、手に取ってじっくり見てみたいですね。なかなかそういう機会がないので。（一社）日本人形玩具学会との共催の明治神宮での着装も、ただ見るだけでしたから。触ることによって、この仕立てはこうなっているんだとか、そういうところを調べたいなと思いますが、なかなかそういう機会はないのでね。

酒井　着せるというのが重要ですね。着るよりも、着せてどうなるか。本当の着せ方はどうなのかとか。例えば女雛でもそうですが、今てんてん前にするのが多いですよね。人形としては、その方が見映えがいいとかね。そういう人形政治的な動きでも、圧がくるんですが（笑）。自分で人間に着せてみて初めて分かるところ、人形では難しい襞のとり方は、どうなっているかとか。

加藤　難しいですね。

林　それは作っている方ならではの意見ですね。明治神宮での着装の実演は、どちらかというと売っている方に、こういうものなんだと知ってもらうのに、いい企画だったと思います。確かに作っている方からすれば、その様子よりも、さらに実際に自分が着せてみて、本物の場合にはこうなんだということが分かれば、作品に活かして頂けますからね。これは日本人形協会の事業として、位置づけられないんでしょうかね。専門の先生にご指導頂いて、本物を着装してみるのは、非常に有意義なことだと思います。

（後編へつづく）

放下鉾の三光丸。3人の人形方によって稚児舞を舞う

2016（H28）年6月に、（一社）日本人形協会と（一社）日本人形玩具学会との共催で行われた「人形と雛の衣裳とその実際～雛人形の源流を求めて」と題した平安装束の着装の様子

「もぬけ（裳抜け）の殻」といわれる五衣、唐衣、裳の脱衣の様子

弔旗